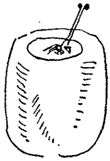
沼木の幼児と火



菱川敦子

宮川の上流と神路山がひろがる、そのすそにある沼木幼稚園は、四季をとわずたんぽぽが咲き、山鳥が訪れる園庭に恵まれ、幼児たちは遊びを、まわりの野山までひろげていく。

とくに、園の近くにある赤井山は、幼児たちの足で十五分くらいで、細いなだらかな坂道をのぼると、頂上につく。

春から初夏にかけて、わらびや、いばらまんじゅうの葉っぱをとりにでかけ、それを使った楽しい遊びは、あくことなくくり返される。また、秋の錦織りなす山波に続く、ぬけるような青い空はすばらしく、園外保育には絶好の日が多い。

晩秋のある日、「先生、赤井山へ探険にいこう」と、六人の幼児たちにさそわれて、のぼることにした。坂道の両側に咲き揃うりんどうの花をとって、私の頭にさしてくれたり、赤い木の実をとって口にほうばったり、楽しい道草をしながら、山のぼりはつづく。

ようやく頂上についた幼児たちは、神社の広場にたき火の跡をみつけ、「先生、マッチもってきたの。たき火しよう」といって、広場に続く山道へ木をさがしにいこうとする。うっ蒼とした山道をみて、不安になった私は、「迷ったらどうしよう」というと、男児は小さい棒切れをさがし、ところどころに道標としてさし、「先生、これで大丈夫」といって、たき火に必要な木を集めてきた。幼児たちは一メートル余りもあるさまざまな形をした根株を組み立てる。その根株の凸凹は大小の空間を構成し、そこへ燃えつきそうな細い枝をさし込んだり、並べたりして、手順は整えられる。

このような幼児の活動は、生活の中で得た知恵であろうか。それとも、幼児の無意識の中にひそんでいる、芸術性であろうか。

やがて、私は紙片で火をつけたがなかなか燃えてこない。すると女児のひとりが、「先生、火吹竹あったら、私が上手

に燃してあげる」と。〃火吹竹〃なんてなつかしい言葉なんだろう。今の幼児たちの生活にそんなものが導入されているなんて、夢にも思わなかった私であった。すっかりうれしくなった私は、「先生がつくるわ」といって、持っていた二、三枚の新聞紙を小さくまるめ、渡してあげると、その女児は、フウー、フウーと頬を紅潮させて吹き出した。火のまわりで輪になって燃えていくようすをみていた五人の幼児たちは、「私もさせて」「僕も」と、順番に新聞紙の火吹竹をまわして吹いている。火吹竹の効果で、火がパチパチと燃えさかると、幼児たちは、そのいきおいに歓声をあげた。

組立てた根株の上に火吹竹をたてて煙突にすると、そこから煙が出てきた。あたりに灰色の煙がたちこめると、「わあ、この煙の中で火わたりしたい」「先生、かんこ踊りのときに、ぼくら火わたりするの」「できた子は強い体になるん」「まあ、そんなおまじないがあったの、先生もさせて」と、六人の幼児たちといっしょに、火をとび越してみる。

このようなおまじないは、伝承遊びと同じように、子どもから子どもへと、伝えられていくのであろう。沼木のしずかな山の中にたちこめた煙と火の中で、おまじないに興ずる神秘的な幼児たちの姿に、私は魅せられてしまう。

幼児たちにとって、火は何かということについてはわからないが、火という魔者は、さまざまなイメージをよび起こさせ、遊びの中に共存していくものであろうか。

毎日の生活の中で、食物を調理したり、身体を温めたり、照明に使う火も、一面、神事においては身心を清める聖なる火である。幼児たちが私に教えてくれたかんこ踊りは、沼木の円座町に慶安初期から伝承されている無形文化財で、豊穣と家内安全、繁栄を祈る年に一度の祭典である。

この踊りでは、父は頭からシャグマをかぶり、腰ミノ、羯鼓をつけ、両手にバチをもち、子どもたちは花笠姿で浄暗の境内に、高張提灯一対を先頭に入場する。この踊りの輪が、深夜の境内に燃えさかる松明によってかもし出す厳粛さは、古きが失なわれるという世の推移の中で、人々の心をとらえてはなさない。

このように、幼児たちの遊びの中にも、火とのかかわりは、いろいろな形で生きつづけていくのであろうか。

(伊勢市立沼木幼稚園)